

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺

住職 大島祥明



霊がへわかるくとはどういふことか

霊がへわかるくとは、いったいどういうことなのでしようか。私には、ときにぼんやりと、ときにしつかりと「本人」を実感するのです。いわばそれは、「本人のごたえ」と言っていていかもしれません。たとえば、背後に視線を感じるといった経験があるかと思えます。そのような、「よくわからないけれども、感じる」「たしかに、なにかある」という感覚と言ったらいいでしょうか。私には生きている人よりも、死んだ人のほうがわかりやすいのです。そして、「本人」の性格、人柄、なにを訴えているのかがわかるのです。生きている人は、心が瞬間瞬間に変化するのだから、わかっていくのです。ところが亡くなると、その時点で、「本人」の心のありようが変化しないで、そのまま止まっているようなのです。だから、わかりやすいわけです。

ただ、霊を感じとれるためには、いささか受信状態が大切です。緊張してはわかりません。リラックスしていたほうが受けとりやすい。たとえば、風呂につかってほっとしているけれども、ぼんやりしているわけではないような状態。

自分を限りなく無というかゼロの状態にしていって、心を研ぎ澄ましていった状態——そんなときに霊を感じやすいのです。

私の場合は、故人を前にしてお経をあげるときが、もつとも研ぎ澄まされた状態になれるのです。私は、故人の霊(本人)がわかり、それを感じながらお経をあげることになります。すると、亡くなった方の霊(本人)の状態によって、声の調子から力の入り方が自然に変わってくるのです。私のその気持ちは「本人」に伝わるのはもちろん、ご遺族にも伝わり「力強いお経ですね」とか、「穏やかな」とか言われることになります。

●大島祥明住職著『死んだらおしまい、ではなかった』(PHP研究所刊)より抜粋。同著の問い合わせ先
☎03-3239-6257 (PHP研究所ビジネス出版部)